

東根長瀬校の「想画教育」についての研究  
—教育方法及び教科横断的視点からの考察—

降 旗 孝

山形大学

山形大学紀要（教育科学）第17巻第2号別刷

平成31年（2019）2月

## 東根長瀨校の「想画教育」についての研究 —教育方法及び教科横断的視点からの考察—

降旗 孝

山形大学

(平成30年10月1日受理)

### 要 旨

昭和初期の東根長瀨尋常高等小学校における「想画教育」は、美術教育史上においては、三大想画実践校の1校として有名である。昭和8年に山形県指定の『技能科教育経営研究会』の開催で、長瀨校の想画教育の最盛期を迎えることになった。

長瀨校の「想画教育」を考察する上では、美術教育という1教科の側面からの考察では不十分である。教育方法の視点から考察すると、当時の教育実践者の教育信念のもとに、複数の教師によって「想画教育」と「綴方教育」が車の両輪のごとくに双方に相まって教育効果を高めた実践であった。教科横断的に児童・生徒に生活に目を向けさせ生きる力を養おうとする一貫した教育観を主軸にして、教科の枠を越えて取り組んだ教育実践であったと、あらためて教育的価値を確認することができた。

キーワード：想画教育、教育方法、生活綴方教育、図画教育、長瀨尋常高等小学校

### 1 はじめに 主題設定の理由と研究の目的

我が国の美術教育史上において、三大想画実践校の1校として全国的に有名な実践と教育成果がこの山形県に存在する。それが、東根長瀨尋常高等小学校（以下長瀨校で表記する）の教育である。昭和時代初期の児童・生徒の作品が、平成30年の現在まで900点以上大量に保存され、さらに東根市の文化財指定を受けている。

美術教育史上では、長瀨校の想画として図画作品のみが特に着目されているが、長瀨校の教育は、想画だけでなく綴り方教育なども充実して行われてきた。その教科間の関連も教育方法の視点から考察すると重要事項ではないかと考えた。

今回、それらの長瀨校の図画や綴り方の作品群を画文集として、後世に残すことはできないかということで、そのための資金調達の方法として、クラウドファンディングによる特別プロジェクトを立ち上げた。すると、これに賛同する多くの人々の協力によって、予定の目標額に達成することができて、編集作業を開始することができたのである。

そして、平成29年9月30日に約90年の月日を経て、画文集「昭和の記憶」<sup>1)</sup>として発刊することができた。

長瀨校の想画については、地元の有志で組織する「長瀨小学校想画を語る会」の存在が

大きい。それは、単に想画の保存・管理だけでなく、地域の総合文化祭「かりがね祭り」にて、その想画を展示し、地元の人々へ公開展示すると共に、来県する想画作品を対象にした研究者たちへの対応、そして美術科教育学会における歴史部会での発表など、初代会長の寒河江文雄氏が、人生をかけて全身全霊で取り組まれてきた。

寒河江氏のご高齢で入退院を繰り返す中で、誠に残念ながら昨年12月20日（享年84歳）に逝去された。寒河江氏亡き後、同時期に彼が長く発刊の夢を抱いていた想画と綴り方の画文集『昭和の記憶』が、約90年という月日を越えて刊行されることができたこの契機に、長瀨校の教育を再考する必要性を感じた。

本研究の目的は、長瀨校の「想画教育」について、教育方法の視点から美術教育という単一教科面ではなく「想画教育」と「綴り方教育」との関連を明らかにし、あらためて長瀨校における教育の意義とその価値を明らかにすることである。

## 2 美術教育史上における「想画教育」の発生について

長瀨校の想画教育を考察するために、なぜ「想画教育」がおこなわれるようになったのか、想画教育が誕生した経緯を美術教育史上において押さえておく必要がある。

美術教育の歴史においては、現在までいくつかの大きなターニングポイントがあった。

明治5年より、我が国の公的な学校制度である学制がスタートした。

その頃の図画教育は、「毛筆画手本」「鉛筆画手本」などの教科書をお手本として、子どもたちにまねて描かせるという模写いわゆる臨画教育が行われていた。

その後、国定教科書として、明治後半から大正時代、そして昭和の初期まで長期にわたって使用された国定教科書「新定画帖」についても基本的には、画家が描いた毛筆画や風景画、幾何図形などが色刷りで掲載されており、学校現場では子どもたちの模写をするお手本として活用されていた。

この当時の図画教育は、教科書を手本として子供たちに模写をさせることを通して、手の巧緻性を高め技能を身に付けさせることを目的にしていたといえる。美術教育界では、手本としての教科書を臨本、それを模写させる教育を臨画教育としている。

それに対して、海外を回って帰国した画家の山本鼎は、臨画教育は不自由だからもっと子どもたちには自由に表現させたいということで、山本が提唱する自由画教育運動が大正デモクラシーの潮流とも相まって全国的な拡がりとなり、大きな影響を与えることになる。<sup>2)</sup>

しかしながら、自由画教育運動に対しては賛否両論あり、山本鼎が執筆した「自由画教育」<sup>3)</sup>では、かなりの紙面を割いて批評に対する反論を載せている。そして、昭和3年には山本鼎自身から自由画教育運動の打ち切り宣言をすることになる。ここか



【図1：「自由画教育」掲載作品】

ら、論争の打ち切りと共に運動そのものも下火になっていくのである。

それでも地方のいくつかの学校では、教科書をお手本としてそのまま模写させる臨画教育ではなく、児童・生徒の生活に根差した表現をさせる図画教育が行われていた。

これは、我が国の美術教育史において1つの重要な位置づけとなっている。

### 3 自由画教育運動後の3大想画実践校について

山本鼎の自由画教育運動そのものが、論争の打ち切りと共に下火になっていったが、それでも全国各地の学校では、教科書のお手本を模写させるような臨画教育ではなく、児童・生徒自身に身の回りの生活や出来事に目を向けさせ、それを素直に表現させる図画教育が行われていた。その図画教育の実践校では、次の3校が後に有名になる。

その1つが、鳥根県仁多郡馬木校である。馬木校には、青木實三郎（1885-1968）が鳥根師範学校を卒業した後、3年後に赴任している。青木は、最終的には校長になるが、明治41年から教職歴約30年間でふりかえり、昭和11年に「農山村図画教育の確立」<sup>4)</sup>という本に自分自身の教育実践をまとめている。図2の作品は、馬木校の想画作品である。



【図2：鳥根県馬木校の想画作品】

もう1つの実践校が、三重県伊勢市宇治山田第四校である。後に早修校に学校名が変わる。この早修校には、中西良男（1899-1988）が教育実践者としていた。中西も昭和7年に発行した「想画による子供の教育」<sup>5)</sup>という本にまとめている。

そして、3校目に有名になるのが、山形県東根長瀨村の長瀨尋常高等小学校である。尋常科6学年と高等科2学年であり、現在でいうところの小学校と中学校とが一緒になっていた。

長瀨校には、馬木校や早修校のように特定の実践者がいたわけではなく、図画主任の佐藤文利、国分一太郎、真木恒夫、東海林隆などの教育実践者が複数で、長瀨校の教育を支えていたことが重要である。

以上の三校を「想画教育」三大実践校として、美術教育史上に位置づけられている。

この「想画」という名称については、昭和4年に後藤福次郎が主催する「学校美術教育協会」において、雑誌「学校教育」の編集会議の席上で、話題となり霜田静志や赤津隆助、上甲二郎、萬富三らの話の中で名付けられたとされている。<sup>6)</sup>

### 4 長瀨校における「想画教育」について

長瀨校の想画教育に関する先行研究としては、青山光佑・西村俊夫・水島尚喜らの研究がある。<sup>7)</sup>それから後も、増田金吾の赤津隆助との関係研究や上中良子の作品を三大想画実践校の研究などが、美術教育史上における想画教育について、昭和初期の図画教育位置づ

けで研究されている。

### (1) 長瀨校における中心的な教育実践者

長瀨校の想画については、昭和2年から長瀨校に赴任した佐藤文利（1901-1968）<sup>8)</sup>がそのきっかけをつくったといえる。佐藤は、明治34年楯岡町湯沢で生まれ、山形師範学校本科一部を卒業している。最初に赴任したのが大石田町横川小学校であり、訓導として採用され、その後、昭和2年から長瀨校に赴任することになる。

その後、昭和5年に山形師範学校を卒業し新採で長瀨に赴任してきたのが、国分一太郎（1911-1985）である。長瀨校の想画教育を佐藤と共に全国的に有名な実践校にしていく。

国分は、明治44年に東根三日町で家業が床屋の家庭で生まれた。そして、師範学校時代の附属校での実習での優秀さが認められ、卒業後は附属校への赴任も期待されたが、国分は家業のことを考え実家の近くの地元校を希望し、最初に長瀨校に赴任することになる。

国分は、師範学校の時より図画教育というより、現在でいうところの作文の綴り方教育の方に興味と関心があり、子供たちの文章による表現をととても重視し大切にしていた。附属校で高く評価されたのもその時の綴り方指導の成果からであった。

長瀨校の想画教育においては、佐藤と国分が重要な中心人物といえるが、長瀨校には他にも真木恒夫、東海林隆などの教師たちも長瀨校の教育を支えている。

想画三大実践校において馬木校・早修校と長瀨校との相違がいくつかあるが、その1つが馬木校には青木實三郎、そして早修校には中西良男がいたが、長瀨校においては図画主任の佐藤文利がいたが、国分をはじめ複数の教師が長瀨校の想画教育に関わっていたということである。この事実は、長瀨校の教育を考察する上で重要事項となる。



【図3：「田植えの頃」尋常科5年】

### (2) 現在まで大量に保存される長瀨校の想画作品

馬木校と早修校の相違のもう1つは、長瀨校には、その当時の作品が現在まで大量に保存されていることである。その作品群は、昭和2年から24年までに制作されたものが中心で、平成8年にはその880点が東根市の有形文化財に指定されている。さらに平成12年には、他に45点が追加され合計で925点が確認されている。<sup>9)</sup>

さらに、最近では東京大学教育学部の図書室の中の「戸塚文庫」内に、昭和5年から11年までの長瀨校の想画作品が新たに8点発見されている。以上のことから、平成30年の現在では、合計で933点の長瀨校の想画作品が現存していることになる。

想画に限らず、過去の児童・生徒作品を保存されている学校も各地にいくつか存在しているが、これほど大量の作品群が現在まで残されているのは、おそらく全国の中でもこの長瀨校だけでないかとも思われる。

この作品群も当時の全ての作品が残されているのではなく、終戦後の検閲を受けた後の

対応なのか、それとも事前に対応したのか、作品リストを見るとその一部に墨塗りで消されたものがあり、焼却処分された作品もかなり多数あったことがわかる。おそらく、昭和10年以降から戦時色が色濃くなり、子供たちの作品の中にも軍国主義の戦争をイメージするような作品や絵柄が反映された作品があったのではないかと予想できる。



【図4：「田の草取り」 高等科1年】

## 5 長瀨校における国分一太郎の「綴方教育」

長瀨校における想画教育について考察するには、図画教育の一面だけでは不十分である。それは、長瀨校の児童・生徒たちは、想画だけでなく綴り方にも力を入れる教育がされてきたからである。ここに長瀨校の想画教育を考察する際には、綴り方は無視できない。

長瀨の想画については、指導者名よりも学校名の方が有名であるが、綴り方については、学校名よりもその指導者である前述の国分一太郎の方が有名である。

なぜ全国的に有名になったのかは、国分は長瀨小学校を免職されてからも執筆活動を続け、数多くの出版物を世の中に出しているからである。そして、生活綴り方教育で全国的に有名な人物となる。

因みに、現在山形大学附属図書館には、国分の関連図書が44冊所蔵されている。

国分は、図画指導も行うが、担任として綴り方指導で多くの文集を作っている。昭和6年の文集「がつこ」をスタートに、文集「もんぺ」そして文集「もんぺの弟」を子供達と共に作っており、文集の中には、綴り方作品だけでなく想画の挿絵も載せられている。

国分は、戦後に綴り方教育で全国的に有名になるが、想画教育の実践者としてあまり知られなかった理由として、寒河江は次のように記述している。

「彼は、戦後の教研、民研などの懇親会の席上でも親しい人々にも、戦前長瀨小学校での図画研究会をやり授業研究や紀要執筆などのことをあまり語らなかつた。語る時は、いつも先輩佐藤文利をはじめ多くの先生達(真木恒雄、東海林隆など)の業績として語った。」<sup>10)</sup>

実際の長瀨校においては、綴り方教育と想画教育とは無関係ではなく相互に関連して、長瀨校の教育を充実させていた。教科横断的な教育が行われていたといえる。



【図5：文集「もんぺの弟」】

## 6 長瀨校における「想画教育」の方法について

長瀨校の想画教育については、昭和8年に山形県指定の「技能科教育経営研究会」の開催によって、長瀨校における教育実践の成果が広く公開されることになる。その実践が、研究紀要として、まとめられることになる。

「技能科教育 研究の一端」という謄写版刷りの全174頁の研究紀要が、長瀨校の想画教育及び綴り方教育の詳細を考察する上での重要な資料になった。

### (1) 想画教育と自由画教育運動との関連

長瀨校の想画教育は、その目的を小学校令施行規則の第八条におきながら、「時代は動く、又人文もそれと共に推移する—法令に対する解釈も時代や人文について推移する」と記している。<sup>11)</sup>

そして、「わが校に於いては法令を出発点とし山本氏の自由画の精神を新しく見直して進みたいと思ふ」とある。

ここに、小学校令を基にして、しかしそれに縛られることなく、山本鼎の自由画教育運動の影響を受けながら、新しい教育方法を模索しようとする意図が見える。

馬木校の青木實三郎は、自由画運動そのものを知らなかった。次のように記述している。

「馬木校の想画教育は相当歴史が古い。この手段をとったのは自然の要求であって、他の模倣でも、亦、人から教えられたものでもない。全く自発的なものである。」<sup>12)</sup>

馬木校が、自発的な教育活動であったのに対して、長瀨の想画教育は、山本鼎の自由画教育運動の影響を受け、それに対して前向きに捉えると共に、自由画教育運動に対して批判的立場であった岸田劉生の「図画教育論」に対しては、「鋭く深い独自の意見を説かれる」と高く評価しており、図画教育にとっては有難い教示であると記述している。

ここに長瀨校の想画教育が、自由画教育運動の論争に左右されるのではなく、その時代の図画教育の主張をそれぞれ視野に入れながら、その共感する教育論を尊重し、教育実践の中に、理論的なものとして反映させていったのではないかと推測することができる。

### (2) 想画教育の指導方法

想画の指導の方法については、次のように明記されている。

「児童の純な思想を表現せしめる法。しかしその思想は記憶・想像・写生等から出発し、それによって構想、構図を遂げしめ、一個の画を作らせるのにある。而して実際作画する上に於いては、児童は自己の環境を眺め、生活を考へ、そこに題材を選び、その写生を写生してこれを画中に組入れ、想像を加へ記憶を交へ、もって一個の創作をなすもので、描画方法中最も重視。」<sup>13)</sup>

この記述から想画指導の方法において、特に重視していたことがわかる。

つまり、単に作品としての絵を仕上げるのが教育の最終目標ではなく、あくまでも子供達に自分自身の環境に目を向けさせ、生活を考えさせることを大切にしていたからである。

これは、綴り方教育にもそのまま反映されている長瀨校教育の重要ポイントといえるかもしれない。

そして、想画の指導方法だけでなく、写生の指導方法については、「実物に対してその風情、形態、色調等を写させ研究させる法。」として、想画と写生とを明確に区別して指導していたことがわかる。

「我校想画は『生活』を題材とせる『生活画』というべき存在である。絵画の題材を単なる物—自然物又は単なる—人物の静かな上半身—のみにとる事に満足せず更にひろく、社会の、郷土の、こどもの人生生活の、『生活の事がら、生活場面、生活情景』の中にとるこどもの絵画である。」<sup>14)</sup>

この一文から、長瀨校における想画教育と図画教育との相違を知ることができると共に当時、想画教育で何を大切に、重視してきたのか理解することができる。



【図6：「六月の自然」尋常科5年】

その実際の想画の授業については、国分一太郎の次の「教室の記録」からわかる。

「今日からかく繪は、五月の生活の絵である。子供たちは、馬をとでもかくようになった。正男は豚の子をかく所である。僕はこのたびの繪をかう話した。

- 1 せまいところをつかめよ。
- 2 今日生活だけかくこと—風景はこの次の時間に、外にかきに行くから、かかないでおくこと。
- 3 繪の中に、詩が一つや二つや、四つや五つと入っている詩をかくこと。こんなことばが生活情緒のこもった繪をつくらせるかについては、まだまだむづかしいが。

繪の第二次限（空間とその奥行と地面）の中の人物だけかかせて、繪の背景を實物寫生によるといふことは、むづかしいことだ。子供たちは生活も自然も共にかきたいのだ。けれども無意味な風景寫生をして、自然寫生でなく、生活背景の生かし方にするためには、この方法もいいと思った。」<sup>15)</sup>

この国分一太郎の記述から、子供たちに生活を描かせることを重視する共に、その教育方法に苦心し、いろいろと工夫しながら試行錯誤して教育実践に取り組んだといえる。

### (3) 想画教育における題材について

想画教育の扱う題材については、教科書ではなく、季節の変化に伴う生活環境の推移を精査して題材を選んだとして、月別に配列した「想画指導題材一覧—純農村生活の表現を主として—」<sup>16)</sup>が、特別に作成されている。

この題材一覧は、昭和7年6月で工夫し、その後漸次増補した。この後も研究して、完全を期したい。と記述されている。

そしてこの題材一覧は、4月から始まり3月の年度終わりまで、行事の項について、仕

事の項、遊びの項、そして自然その他の項の内容が、一覧表で整理されている。

これによって、教師はもとより児童・生徒も自分の描きたい題材を選ぶことが可能になっている。教育方法としては、題材の設定が重要事項であるが故にとても有効である。

「各学年別の指導に当たりては、この題材よりヒントを得、学年に適應せる取材と画想の工夫をされるやうにした。」と記述されている。

ここから、この題材一覧を参考にして、各学年に応じて工夫しながら教育に臨んだことがわかる。これにより単学年・単独ではなく他学年にわたり複数の教師が題材設定を可能にすることができる題材一覧表といえる。

そして、想画より綴り方の題材をとり、また綴り方より想画の題材をとりうるとし、絵と文の総合表現であったことがわかる。<sup>17)</sup> これは、現在文部科学省が教育のキーワードとしているカリキュラム・マネジメントの教科横断的な学びと重なる。

#### (4) 想画表現と綴り方表現の関連について

長瀬校における想画教育と綴り方教育との関連については、児童・生徒に身の回りの生活や仕事などに目を向けさせ、それを素直に表現させることを重視してきたことがわかる。

そして、想画表現と綴り方表現の過程について、次のような表にまとめている。

	想 画	綴 方
生 表 現 前 活 の	よい生活－描かんとする生活 1 生活観察 研究 調査 反省 2 題材発見－目標決定	よい生活－綴らんとする生活 1 生活の観察、反省、調査研究 2 題材発見への努力－目的設定 目的意識
構 想 作 用	構図－構成－画想 生活の場面、情景 事がらの展開、ひろがり	構想－（腹案） 生活の事がら プロット決定 （自然に、または意識的）
作 表 現 用 の	描画 1 形の素描－事へのひろがりの基礎として 2 線描－鉛筆、毛筆→具象化 3 色、光、明暗等	記述 想の流れとしての生活の展開の描写 文章表現→ 形象化
反 省	吟味 表現内容、表現様式の緊密性	推敲 表現の緊密 ○心の流動の反省 心のてんさく
表 現 後 の 生 活	鑑賞 合評 研究 美術講話－えのおはなし 社会的利用－（陳列、画帖、画集）	鑑賞 合評 研究 文話 社会的利用→生活の実践へ 朗読会 文集

方法的視野から見ての図画と綴方については、次のように記述されている。

「綴方と想画もそれが子どもの発表科、生活科である点において同一性を有し、想画は絵による具象化である故に、時間制表現の不備を有し、綴方表現は文による形象化であり、絵による表現にまさる思惟表現の優越性を有し、しかも空間性表現の困難を有している。したがって綴方にとり得たる題材が必ずしも想画にとり得ない理由はここにあるのである。」<sup>18)</sup>

この記述から、長瀨校の教師たちは、想画教育と綴り方教育の共通性を意識しながら、絵による表現と文による表現のメリットとデメリットについて理解しながら実践していたことがわかる。教育方法の視点からも児童・生徒に表現させる重要な要点でもある。

## 7 現在の長瀨校における「想画教育」について

長瀨校の想画教育について、平成時代の現在になって新たな教育的意義と価値があると思われるのが、地元の有志達を中心に組織する「長瀨小学校想画を語る会」（現在の会長小野正敬氏）のメンバーが現代の長瀨小学校の児童を対象に想画の授業を行っていることである。それは、図画工作科と国語科と書写という複数の教科にまたがる、まさにこれからの教育改革のキーワードとなっている教科横断的なカリキュラム・マネジメントともいえる想画と俳句と書写の授業を毎年実施しているからである。

それは、「長瀨小学校想画を語る会」初代会長の寒河江文雄と長瀨小学校との関係から6年生を対象に毎年想画教育が行われ、既に10年以上続いている。筆者もその「想画を語る会」のメンバーの一人として、授業記録などを行ってきた。

この想画の授業は、単なる特別なイベントで終わるのではなく、長瀨小学校の校長や教師が異動で転任して新しい校長や教師が赴任してきても毎年継続的に実施されている。これは、長瀨小学校が地域にひらかれた学校として、地域の人々の協力を得ながら地域人材を活用した充実した教育実践ととらえることもできる。

10年ほど前の想画の授業の初期の段階では、6年生を対象に想画について寒河江氏が説明した後に、身の回りの生活を児童が絵に表現する授業であった。

その後、長瀨地区で行われていた夏の灯籠祭りに着目し、それに長瀨小の児童も参加させようと、その灯籠の絵と文とを想画授業で行うようになった。

最初は、昭和の国分一太郎らの指導によって作られていた長瀨かるた<sup>19)</sup>を想画の題材にして、墨と筆をつかって児童たちに絵と文とを表現させていた。しかしながら、その長瀨かるたの内容が昭和初期の時代を背景にしたものであったので、現代の子供たちにはその風景や情景がイメージしにくいものもあった。そこで、次の年から想画の授業の在り方も題材から修正する必要があり、改善していったのである。



【図7：児玉氏による書写の授業】

最近に至っては、この絵と文によるかるたの形式を踏襲しながら、学級担任ではなく、長瀨小学校想画を語る会(現在の会長 小野正敬氏)を中心とする地域の方々が中心になって指導している。そこでは、現在の子ども自身が身の回りの生活に目を向けて、まず国語の学習を生かして俳句にするのである。

そして、それを灯籠用に墨による書写で表現している。この書写の指導については長瀨小OBで、語る会の児玉博昭氏が行っている。図7の写真は、児童が書いた作品を黒板に貼って、児童達自身で作品を選定している場面である。

絵については、同じく長瀨小OGで、長瀨小想画を語る会の武田久美子氏が指導し、その俳句の情景から、子ども自身が絵を下書きし、墨と筆で描き、水彩絵の具で着色するのである。図8の写真は、過去の想画作品を黒板に掲示しながら、描く際のポイントについて武田氏が説明している場面である。

そして、7月末の長瀨小学校の授業参観日には、6年生の児童ができあがった絵と俳句を保護者と共に灯籠の枠組みに貼り付ける作業を行うのである。

できあがった灯籠は、暗室にもできるコンピュータ室に持っていき、灯籠に火を点灯するのである。そして、部屋の電灯を消すと、そこにはろうそくの光に照らされた絵と文字とが幻想的に浮かび上がるのである。毎年、子供たちと保護者の歓声があがる瞬間でもある。

さらにその灯籠たちは、長瀨地区の夏の盆祭りでもある「長瀨灯籠祭り」にて、元陣屋跡の二の堀に浮かべて点灯され、お祭り参加と共に地域の人々にも披露されるのである。

今年は8月13日から15日にかけて、その長瀨灯籠祭りが行われた。旧陣屋跡のお堀に、各地区などの灯籠と共に、長瀨小6年生の想画と俳句の灯籠も浮かべて点灯された。

他の地区から出されて浮かべられている灯籠たちは、そのほとんどが既成のマンガやキャラクターの同じような絵柄である。

そのような灯籠が多く並ぶ中で、長瀨小学校の灯籠については、一人一人の児童が自分の生活を見つめ自分自身の思いや感じを俳句と絵で表しており、そこのエリアだけ、独特な異彩を放っていた。借り物でない児童自身の表現の良さとその魅力を実感できる場となっている。長瀨灯籠祭りでは、灯籠を見るためにかけつけた児童たちも



【図8：武田氏による想画の授業】



【図9：山形新聞の朝刊1面のカラー記事として掲載】

保護者も祖父母も本当に喜ぶ姿が見られた。

翌日8月14日の地元紙山形新聞の朝刊1面には、それがカラー記事となり紹介された。(図9) 長瀬小学校における想画の授業が、地域とつながり教育的効果が大いに発揮されたものとなった。長瀬校の想画教育が、歴史的な教育的価値のみならず、現在の子供達にも想画の魅力を継承し将来に託していることが、新たな教育的価値を生み出しているのではなかろうか。

## 8 おわりに 長瀬校の教育的意義と価値

今回、「長瀬小学校想画を語る会」の代表であり初代会長の寒河江文雄氏の逝去と共に、寒河江氏が実現を長らく夢見ていた長瀬校の想画と綴り方の両方の作品を掲載する画文集(図10)が発刊されたことを契機に、もう一度長瀬校の教育を考察することができた。

長瀬校の教育について、当時の研究紀要や寒河江氏が研究し残された多くの資料を調べれば調べるほどに、長瀬校の想画教育が単に図工・美術という1教科によって生み出されたものではないことを再確認することができた。

長瀬校の想画教育については、図画主任の佐藤文利だけでなく国分一太郎や東海林隆などの当時の教育実践者が、絵や文章としての作品づくりという前に、児童・生徒に自分自身の生活や仕事などに目を向けさせることを最も大事にしてきた。ここに長瀬校の教育的意義があった。

その教育方法の過程において、生活を絵によって表現する「想画教育」と文によって表現させる「綴り方教育」とが車の両輪のように相まって、教育的な相乗効果を生み出してきたともいえる。

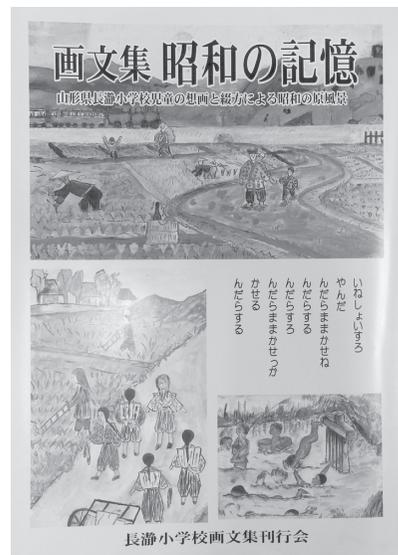
現在、文部科学省が学校教育現場に学習指導要領の教育を実現するために、授業改善のキーワードとして主体的深い学びとしてのアクティブラーニングや教育改善や時間割編成の工夫等としてカリキュラム・マネジメントを強要している。

長瀬校の実践は、当時の文部省の意向や管理職からの要求とは無縁の所で、目の前の子どもたちの教育に真摯に取り組んだ、本当の意味での教科横断的な学びとしてのカリキュラム・マネジメントの教育実践であったともいえる。

また当時の作品が平成30年の現在まで大量に保存されていることについて、寒河江氏は次のように述べている。

「それにしても、幾度かの校舎改築と新築、校舎と教室の移動があったにもかかわらず、今日まで保存されていたことは、本校に在職された先輩の先生方の深いご配慮の賜物であると思います。」<sup>20)</sup>

長瀬校の想画作品は、当時実際に授業をして携わった教育実践者だけでなく、その後赴



【図10:「画文集 昭和の記憶」】

任してきた多くの教師たちにも代々引き継がれて、想画を語る会のメンバーと共に現在に至るまで大切に保存されてきたことがわかる。

そして、作品だけでなく長瀨校の想画教育が、現在の子どもたちにも引き継がれ、自分の身のまわりの生活や環境にも主体的に目を向けて自ら考えると共に、自分自身の思いや感じを大切にしながら、絵や文に表現することの楽しさとその良さを味わえる教育を未来に繋げて行ってほしいと強く願う。

## 〔謝 辞〕

長瀨校の想画については、人生をかけて全身全霊でその保護と普及に取り組まれてきた「長瀨小学校想画を語る会」の代表であり、初代会長の寒河江文雄氏に対して、深い感謝の意を表すると共にここにご冥福を祈りたい。(平成29年12月20日逝去 享年84歳)

なお本研究は、平成29年～平成31年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) (研究課題番号17K04738) の研究成果の一部である。

## 註、引用文献一覧

- (1) 長瀨小学校画文集刊行会によって、平成29年9月30日に「画文集 昭和の記憶－山形県長瀨小学校児童の想画と綴方による昭和の原風景－」として発刊することができた。想画作品の選定については「長瀨小学校想画を語る会」のメンバーが、綴り方作品の選定については、「国分一太郎『教育』と『文学』研究会」のメンバーがあたった。
- (2) 山形寛 (1963)、「日本美術教育史」。黎明書房、pp. 493－510
- (3) 山本鼎 (1972)、「自由画教育」(復刻版)、黎明書房、原著は、大正10年ARS刊である。
- (4) 青木實三郎 (1882)、「農山村図画教育の確立 島根県馬木村小学校」(復刻版)、黎明書房、原著 学校美術協会出版部)、
- (5) 中西良男 (1932)、「想画による子供の教育」、文化書房、
- (6) 増田金吾 (2008)、「想画教育の発生と展開－長瀨小学校における佐藤文利の指導と赤津隆助との影響関係にふれつつ－」、「美術教育学」美術教育学会誌29巻、p. 515
- (7) 青山光佑・西村俊夫・水島尚喜 (1991)、「山形県長瀨校の想画教育について I」、大学美術教育学会誌第24号、pp. 49－58 この研究は、Ⅲまで続く
- (8) 佐藤文利については、平成30年山形新聞の「やまがた再発見」として、9月30日426の上、10月7日427の中、10月14日428の下の3回にわたって、菊池和博が特集記事として書いている。
- (9) 想画作品については、「長瀨小学校想画を語る会」によって整理され、2003年に「山形県長瀨小学校想画名簿」が作成され、学年・作者名・題名・地区名まで一覧表化されている。
- (10) 寒河江文雄 (2006)、「国分一太郎の想画教育資料～長瀨小学校の実践を語る」、国分一太郎「教育」と「文学」研究会、東根市東の杜資料館、p. 23
- (11) 「技能科教育 研究の一端」(1933)、長瀨尋常高等小学校、昭和8年9月28日、p. 9

- (12) 青木實三郎（1882）、前掲書、p. 168
- (13) 前掲書、「技能科教育 研究の一端」（1933）、p. 26
- (14) 前掲書、「技能科教育 研究の一端」（1933）、p. 94
- (15) 寒河江文雄（2006）、前掲書、東根市東の杜資料館、p. 25
- (16) 前掲書、「長瀬小学校における想画指導題材一覧－純農村生活の表現を主にして－」  
「技能科教育 研究の一端」（1933）、pp. 51－75
- (17) 寒河江文雄（2006）、前掲書、「国分一太郎の想画教育資料」、pp. 8－9
- (18) 前掲書、「技能科教育 研究の一端」（1933）、p. 105
- (19) 長瀬かるたは、国分一太郎が担任の時に尋常四男第二組共同で作った文集「もんぺ3」  
に掲載されている。（「画文集 昭和の記憶」、2017、p. 52）
- (20) 寒河江文雄（1995）、「昭和初期長瀬小学校の想画教育 ～佐藤文利の想画による教育～」、  
長瀬地区ふるさとづくり大会実行委員会・長瀬公民館、p. 14

## Summary

Furihata Takashi

### A study of The “Souga art education” at Nagatoro school in Higashine - Consideration from Educational method and Cross-sectional Perspective

“Souga art education” at Nagatoro School in the early Showa era is famous as one school of Three Major Schools in the history of art education. With the holding of the “Technical course education research meeting” designated by Yamagata Prefecture in 1954, Nagao school had the highest peak of imaginary education.

It is not sufficient to consider only the subject point of art department. Considering from the viewpoint of education method, under the educational belief of educational practitioners at that time, “Souga art education” and “staple education” were carried out by a plurality of teachers, mainly Sato Fumitoshi, Kokubu Ichitaro as the two wheels of a car. In collaboration with the two sides to enhance educational effect.

I was able to confirm the significance of education once again that it was an educational practice that centered on the consistent view of education that aims student to focus their attention on life and to live their lives, and beyond the framework of the subject.